

原田治郎研究

——日本美術英語解説執筆者の経歴と業績——

小前ひろみ

1. はじめに

明治末から戦後に至る文化激動の時代に、日本美術を英語で欧米に紹介し続けた原田治郎（1878-1963、以下、原田）という人物がいる。少年時代から単独渡米というユニークな経歴を持ち、原田の著作は美術雑誌、庭園論からブリタニカ百科事典にまで及ぶ。彼は著作をもって欧米における日本美術の受容に大きく貢献した。海外で原田は高く評価されているが、日本では原田の業績を記す物は少なく、先行研究では明らかにされていない部分がある。原田の業績を明確にすることは、大正期から戦後の期間に、欧米での日本美術受容を把握するために重要であると考えられる。本稿では原田の経歴と出版物を収集し、英語解説者としての執筆業績を正しく評価することを目的とする。

まず、原田の経歴を生誕から渡米、帰国して教職に就き、日本政府事務官や通訳として活躍し、美術雑誌で日本美術の英語解説に携わった時期をたどる。経歴の資料は原田が勲五等瑞宝章を没後受勲する際に内閣へ提出した履歴書（以下、受勲時履歴書）や渡航記録などを用いた。その上で、東京帝室博物館（以下、帝博）嘱託となつてからの、原田の英語解説執筆者としての業績をまとめる。業績については *The Studio*（以下、*Studio* 誌）の原田執筆全記事¹⁾と出版物²⁾を対象とした。

近年、少しずつではあるが、原田を扱った論文が書かれ始めている。その端緒となつたのが、工藤芳彰と宮内愠の『『ステューディオ』誌の日本に関する記事（1902-1915）の掲載意図』（2003）³⁾と、片平幸の「欧米にお

ける日本庭園像の形成と原田次郎の *The Gardens of Japan*」(2007) と考えられる。工藤らは、英国の美術雑誌 *Studio* 誌の日本に関する記事の研究で、研究対象とした記事 25 本の内 11 本が原田の寄稿であることから、原田の業績を取り上げている。片平は原田の主著である *The Gardens of Japan* を「日本人によって英語で著され、さらに欧米で出版された日本庭園論としては最もはやい単行本」⁴⁾ とし、「岡倉天心の芸術観や茶の湯の融合を、日本庭園の理解に結びつけて欧米の読者に示した」⁵⁾ と分析している。日本人研究者の英語による庭園論の中では原田が「突出した頻度で」⁶⁾ 参照されているとも記している。

両論文に続いて、管靖子は「両大戦間期イギリスの空間のジャポニズムにみる生け花・盆栽の影響」(2010) の中で原田の *Studio* 誌掲載記事が「日本の空間デザイン」の英国での受容に貢献したことを記している。ニコラ・フィエヴェは「日本庭園について英・仏語で出版された三冊の主要な書物」(2011) で *The Gardens of Japan* をその 1 冊とし、「アカデミックな世界の間人でもなく、造園家でもなく、美術史の専門家でもない原田」が「日本の文化・芸術を英語で人々に知らしめることになった」⁷⁾ と評価している。笹内宏紗と渡邊研司は「原田治郎による“The Lesson of Japanese Architecture” (1936) の出版と社会背景」(2018) で同書が覆刻・再版され、現代に至るまで評価され続けていると書いている。江本弘は「建築語彙のなかの『シブイ』とその国際化過程」(2020) で原田が日本語以外の言語で「シブイ」を初めて紹介したとしている。

原田の著作以外の業績に関しては、志邨匠子(2012) は日本古美術展覧会の開催に際して原田が貢献したことを、神辺知加(2020) は帝室博物館から国立博物館に移行する際の GHQ との交渉に原田が携わったことを記している。しかし評価については庭園など一部分についてのもので、原田の業績の総体を評価にはいたらず、まだ原田の業績研究は途上にあるといえる。

2. 英語解説執筆に至るまでの経歴

原田再認識の端緒となった工藤ら（2003）は東京国立博物館（以下、東博）保有の原田の履歴書からの略年譜を記載し、原田子息の聞き取りなどから *Studio* 誌への執筆に至る経緯や、その後の執筆活動について記述している。片平（2007）も子息に聞き取りを行い、原田が 15 歳で単身渡米し、事故に遭うもカリフォルニア州立大学に進学したことから晩年までを、エピソードや *Studio* 誌の記事などを交えながら紹介している。両論文により多くの情報を得て以降の論文は執筆されているが、論文相互に渡米時期と教職着任時期において齟齬があり、滞米生活や大学の専攻には言及がないなど、原田の経歴についての調べが不十分であると考えられる。本稿ではこれらを補いながら論を進める⁸⁾。

原田の職業経歴は大学在学中であった 25 歳からセントルイス万国博覧会（以下、セントルイス博）の政府事務員から始まる。同博での活躍が日本政府に認められ、原田のその後が決まってゆく。名古屋高等工業学校（現・名古屋工業大学、以下、名高工）の教職が用意されて帰国し、様々な海外任務を任されるようになる。その過程で *Studio* 誌の“corresponding editor”⁹⁾（通信論説員）となり、美術記事の執筆者として歩み始める。

2-1. 生誕から渡米（1878-1901）

原田は 1878 年（明治 11 年）12 月 2 日、山口県大島郡屋代村（現・周防大島町）の原田勝五郎の次男として生まれる。『現代防長人物誌・天』（1917 初版、1987 覆刻、以下、『人物誌』）によると、原田家は「代々の農家」である¹⁰⁾。原田の大姪である河野出奈の談¹¹⁾によると、原田の祖父・忠兵衛（養子）と母・クニの実家である永田家は往時酒屋を営んでいた。『周防大島町誌』には小松郵便局の初代を永田家、2 代目局長を原田の兄・久太郎が、三代目を久太郎の長男・元雄（河野の父）が務めたと記されている¹²⁾。酒屋経営や特定郵便局長歴任など、地元では力のある一族であったと推測できる。村には明治の学制前から郷校、寺子屋、塾などの教育環境が整い¹³⁾、河野によると忠兵衛は教育熱心であったという。東博保有履歴書に原田は 1893 年

3月山泉高等小学校卒業と記述されている。

周防大島はハワイ移民が多く、1885年に開始されたハワイ官約移民第1回の約3割が大島出身であった¹⁴⁾。移民と一般的に言われているが、石川(1967)によると、実際は出稼ぎの側面が強く、3年の契約満了直後の帰国者は全体の37.2%いた¹⁵⁾。住民の生活はハワイからの仕送りなどで潤い、「芋喰島と仇名され(中略)た大島郡が、常に他都人から瀬戸内海の蓬莱島と羨望され」る状況があった¹⁶⁾。小学生の原田はハワイ帰りの人々から米国の話を聞いていたであろう。工藤(2003)は原田が「欧米崇拜と追従の時流を強く感じ」たことを記している¹⁷⁾。

原田の渡米について『人物誌』には「偶々渡米の機会を得て(中略)裸一貫にして別に何らの後援を有するなく」とある¹⁸⁾。「たまたまの機会」は何であるか不明であるが、原田は欧米への希望を持って渡米を決意する。片山潜(1859-1933)が自身の留学経験を元に書いた米国留学手引き書『渡米案内：正編』に、1900年頃の渡航必要額は、船賃と上陸時の見せ金などで金百五十円とある¹⁹⁾。渡航費用は家族や永田家が工面した可能性も考えられるが推測に留まる。

原田が高等小学校を卒業した1893年の8月26日の横浜出港・サンフランシスコ直行航路のベルジック号乗船者名簿²⁰⁾に、原田の渡航は記載されている。「14歳9ヶ月、Student、Yamaguchi」とあり、9月9日に到着している。名簿には原田と同じ「学生」で同郷の20代3名が乗船しており、彼らとの関係は不明であるが、同行者と考えられる。

工藤(2003)に、原田は「全く英語がわからないままに単身渡米し、懸命に勉強した」とある²¹⁾。後述する事故の裁判記録²²⁾に“self-supporting student”(私費学生)と原田が証言しており、滞米生活は自活である。『米国日系人百年史』によると原田の住んだアラメダは、サンフランシスコ市対岸の住宅都市で、日本領事や正金銀行支店長が住んでおり、日本人の入植開始は原田の渡航年の1893年である²³⁾。

「在留日本人は主として庭園業、家庭労働に従事」したが²⁴⁾、通常の労働従事では勉強をする時間は取れない。『渡米案内』には「或る家族に住み込みて朝夕家事の助けをなし学校に通学する時間を得」られるスクールボーイ

(以下、学僕)が良いと記されている²⁵⁾。松盛(2016)によると、当時米西部の私費留学生の多くが学僕をしている²⁶⁾。原田と同年に渡米した、後の外務大臣・松岡洋右(1880-1946)と英詩人・野口米次郎(1874-1947)の両名も学僕をした。東博保有履歴書には「普通学ヲ修業ス」と記載があり、原田も学僕をしながら通学したと考えられる。アラメダでは原田の渡航年に学友会が学僕間に組織されている²⁷⁾。原田は14歳で英語を身につけ始め、アメリカ人家庭の中で働き、現地の学校で学び、生活からアメリカ文化を理解したと考えられる。

原田は19歳の1898年10月4日に、サザン・パシフィック鉄道での事故²⁸⁾で片足を失う。『人物誌』には「遭難後と雖もよく勉学を励み、余暇には英語を教へ、或は諸種の雑誌に執筆し又或時は裁判所の通訳を務めて」という記述がある²⁹⁾。渡米5年目の原田はすでに英語を身につけ、雑誌への執筆活動を始め、移民仲間への英語指導や、中立・公正な立場が求められる司法通訳を行っていた。このことは原田が後に執筆者、教師、報道官として活動した基礎となった。そして原田は22歳の1901年6月7日にハイスクールを卒業した。

2-2. カリフォルニア州立大学入学(1901-1904)

原田は1901年9月11日にカリフォルニア州立大学バークレー校³¹⁾(以下、バークレー校)に入学した。『大東京構成の人及其事業』(1931)に原田は「社会学と文学」を専攻したとある³²⁾。実証学的考えを学ぶ「社会学」と文章力を磨く「文学」を専攻したことが原田の日本美術解説の学問的背景となる。

現カリフォルニア大学の校史サイトによると³³⁾、ウィーラー(Benjamin I. Wheeler, 1854-1927)が1899年に学長に着任し、大学を発展させた時期である。*The Economic Situation in Japan*(日本経済の状況)(1898)を書いたモーゼス(Bernard Moses, 1846-1931)が歴史と政治を教えている³⁴⁾。英語科(文学)はゲイリー(Charles M. Gayley, 1858-1932)が、シェイクスピア研究が主流の当時としては画期的な試みであるアメリカ文学研究を導入して教えていた³⁵⁾。原田の英語科での学びは、少年期からの英語環境で

養われた原田の英語能力を更に磨き、アカデミックライティングを身につけさせた。

原田は美術を専攻していないが、学内に図書館を備えたパークレー校美術館（BAMPFA、1881年創立³⁶⁾）があったことは美術の知識を得た1つの要因となる。原田は*The Gardens of Japan*の刊行に関する読売新聞のインタビューに「私は子供の頃から美術が好きで正規の教育は受けませぬが好きな道だけに美術方面の書物は手当たり次第に閲読して居りました」と語っている³⁷⁾。原田は美術館で絵画を鑑賞し、図書館で資料を読み、自学で美術を学んでいったと考えられる。

2-3. セントルイス博と日英博覧会における英語解説業務（1905-1912）

受勲時履歴書によると、原田は大学3年目の25歳でパークレー校を中退し、1904年4月3日に同月30日から開催のセントルイス博臨時委員会事務員の職を得た。『人物誌』によると男爵松平正直・博覧会副総裁（1844-1915）の「秘書兼通訳」に抜擢された³⁸⁾。楠元（2003）によると同博は、敷地交付式に手島精一博覧会事務局長が「世界の他の国々と肩を並べられることを示し」と述べ³⁹⁾、加藤（2017）は移民問題などを抱える日米関係の強化や日露戦争の外債募集などの目的があったとしている⁴⁰⁾。14歳から9年間日本を離れていた原田にとっては日本文化との再会であった。国威の表象として博覧会に展示される日本美術は、原田に大きな影響を与えたと考えられる。

博覧会事務局では東京美術学校校長の正木直彦（1862-1940）や、後に共に*Studio*誌に寄稿する執行弘道（1853-1927）など、美術界の重要人物と出会う。元来の美術への興味に加え、通訳の準備を行う中で、会場で美術の名品を眼前にし、正木などの専門家が身近にいる環境は、原田には大学の講義以上の専門的勉強の場となったであろう。会期中に、原田が影響を受けたとされる岡倉覚三（天心、1863-1913）が万国学術会議で「絵画における近代的問題」を講演している。原田は日本を担う通訳の仕事をこなし、『人物誌』の記述によると、博覧会内で開催された国際会議である万国新聞記者大会⁴¹⁾では日本代表として「得意の快舌を揮ひ」活躍した⁴²⁾。

同博は7ヶ月後の1904年12月1日に閉会し、翌年4月10日に原田はパークレー校に復学するが、その後、警電⁴³⁾にて新設の名高工の英語講師を任せられる。再び大学を中退し、8月に帰国して同月28日に英語講師嘱託となり、9月1日から授業を始めた⁴⁴⁾。『資料日本英学史2』によると、明治開闢以来外国人講師に頼った英語教育を、留学帰りの日本人に任せようという流れがあったが⁴⁵⁾、学閥真っ盛りの時代に、官学出身でもなく、官費留学でもなく、大学中退で学位のない原田の起用は異例といえる。

赴任先の名古屋は原田に地縁はなく、11年間慣れ親しんだ米国とも異なる。しかし明治以降に工業都市として発展する一方で、日本の伝統文化が豊かな地であり、日本を再認識するには良い場所であった。原田が4年後の滞英中に書いた*Studio*誌の記事には、日本美術に関する造詣の深さが認められることから、在名古屋の4年間に原田は日本美術の自学を進めたと考えられる。1908年には第八高等学校（現・名古屋大学、以下、八高）の新設に伴い、同校の英語講師も嘱託されて2校兼任となる。この八高の初代校長が後に原田を東京帝室博物館（以下、帝博）嘱託に任ずる大島義脩（1871-1935）である。1909年、原田30歳の6月に名高工では教授に昇格し、“Prof. Harada”が肩書きになり、叙高等官六等、7月に叙正七位となる。そして8月に日英博覧会（以下、日英博）事務嘱託を任せられ、渡英のため11月より両校を2年間休職する。

林（2015）によると、日英博は日英同盟の強化を目的とする国家的イベントと位置づけられ、見どころを歴史・文化に置き⁴⁶⁾、国宝を含む古美術と様々な日本美術が展示された。同博副総裁はセントルイス博と同じく松平正直であった。日英博英語版公式カタログには“press manager”（報道官）として原田の名が単独で記載されており⁴⁷⁾重責を担ったことがわかる。会期は1910年5月12日から10月29日であったが、博覧会終了後も原田は英国に留まり、翌年5月に文部省の英外国語教育等調査嘱託を受け、米国経由で同年12月に帰国した。

作家のモリソン（Arthur Morrison、1863-1945）が*The painters of Japan*（1911）の序文の謝辞に正木と共に原田の名を記していることにもみられるように⁴⁸⁾、原田は滞英中に欧米の美術界と交流が生まれ、*Studio*誌の通

信論説員となる。同誌は来日経験があるホーム（Charles Holme、1848-1923）が1893年にロンドンで創刊した。Schmalenbach（1935）によると、1890年代のドイツ国内だけでも予約購読者が2万人を超えている⁴⁹⁾。『チャールズ・ホームの日本旅行記』によると「芸術に関心を寄せる中流階級」に好まれており⁵⁰⁾、美術がステータスであり、中流階級の上昇志向という時代の潮流によって勢いがあった雑誌である。ホームは初代編集長を務め、同誌にはホーム自身の興味と時代の求めとで、日本に関する記事が創刊期から掲載されている。原田は前掲の読売新聞に「日英博覧会が開かれた時偶然にも『スタジオ』社の前社長故チャールズ・ホーム氏の知遇を受け、其以来ス社との関係が結ばれまして美術鑑賞に依る日英親善、國際修好といふやうな方面に微力を致すことになつたのです」と語っている⁵¹⁾。ホームは日本協会⁵²⁾の創立メンバーでもあり⁵³⁾、同会は日英博の開催協力をしてきた。Studio誌に日英博出品作をベースに日本の美術を伝える6回の連載が組まれ、絵画・彫刻・金工・七宝を原田が、陶磁器を執行弘道が担当した。日本絵画を紹介した原田のデビュー記事は、日英博会期中の1910年7月号（Vol.50、208号）に掲載された。記事では主に日英博展示の絵画を例に取りながら、日本の絵画の魅力と鑑賞法を様々な角度から具体的な例を交えて示し、丁寧に理解へ導いている。

原田は帰国までの2年間にこの連載を含め7本の記事を書いた。ここから“Prof. Harada”の英語解説が欧米の美術愛好家に広く読まれることになる。原田は休筆期間を挟むものの生涯にわたり同誌に記事を書き続けた。原田は自身の書翰に同誌のレターヘッドを使ったり⁵⁴⁾、政府雇用が切れた際の渡航記録の職業欄には“writer”と書いたりするなど⁵⁵⁾、同誌の通信論説員は原田の自己認識の一部となった。

2-4. 巴奈馬太平洋万国博覧会と国際会議における英語解説業務（1912-1926）

原田は1911年12月の帰国後に名高工と八高に復職し、4月より両校とも教授となり、以降約2年半、Studio誌に記事を書きながら教職を続ける。34歳の1912年10月24日に正倉院宝物⁵⁶⁾を初拝観する⁵⁷⁾。宝物は海外

でも有名であるが、拝観できる期間と資格が限られており、拝観は原田の念願であったであろう。翌年の242号に正倉院を世界最古の博物館として誇らしいと紹介している。後に原田は正倉院拝観通訳を務め、帝博で『正倉院御物図録』作成に携わり、正倉院についての英文書籍を2冊著し、戦後には正倉院評議会委員を務めるなど、正倉院宝物と深く関わることとなる。

原田は35歳の1914年7月に叙従六位に、8月に巴奈馬太平洋万国博覧会理事官となり両校を休職し、11月に渡米する。同博覧会はパナマ運河の開通と太平洋発見400周年を記念してサンフランシスコで1915年2月20日から12月4日まで開かれたが、第一次大戦中であり欧州列国の参加は遅れた。加藤(2018)によると、日本の参加は開催地で進む排日運動対策の側面が大きかったとある⁵⁸⁾。博覧会開幕早々の2月22日に、日本展示館で偽爆弾事件が起きる。排日運動かと騒然となりかかるが、2月24日に原田の談話が日本政府報道として複数の米紙に掲載される。爆弾騒ぎを“*We believed it to have been a practical joke and have kept silent about the matter, because of its triviality*”⁵⁹⁾(我々はこの件は悪ふざけだと受け取って、沈黙を守っている。理由は取るに足らない事だからだ)(拙訳)と受け流した。原田の弁舌が社会の緊張を和らげた好例である。

翌1916年1月に帰国し、同年4月、37歳で名古屋の名士・服部俊一(1853-1928)の長女・初枝と結婚した。沖田(1982)によると、初枝は女子英学塾出身⁶⁰⁾で英語堪能⁶¹⁾、茶道・香道に長け、後年にその道の重鎮⁶²⁾となった。初枝との生活は原田に知識のみならず日常としての日本美術を体現させた。同年5月に勲六等瑞宝章を叙勲するが、文部大臣より休職命令も受けている。名高工と八高の学校一覧では1917年休職、1918年は八高退官、名高工は無記載である。1905年に教職に就いて以来、通算すると教鞭を執ったのは実質7年間であった。離職後は*Studio*誌に1917年8本、1918年6本の記事を書いている。内容は上野の公募展7本、新橋の東京美術倶楽部の売り立て記事6本と、頻繁に名古屋から東京に来ているのがわかる。パークレー校の同窓誌『麦嶺学窓』には「専ら美術研究中の由」⁶³⁾、辞職して東京に移住したと記されている。原田は1918年末頃に上野桜木町に転居した。

転居後の原田は、国際会議への派遣が続く。鳥飼（2013）は、大戦後のベルサイユ体制下で国際会議が増えて通訳ニーズが増大し、この頃の会議通訳者たちは「外交官や国際機関職員と同様の待遇を受け（中略）スター的存在だった」と記述している⁶⁴⁾。1920年に第2回労働総会事務官としてジェノヴァに派遣され、欧州諸国・米国を経て帰国する。1921年には第3回労働総会代表委員付としてジュネーブに派遣され、続いて欧米の農商務省調査をしている。この間、一次的に *Studio* 誌の寄稿が停止するが、1922年末の356号に *The Gardens of Japan* の元となる記事「The Japanese Gardens」を書いてからは、再びほぼ毎月記事を投稿している。床の間、生け花、盆石など、初枝の影響からか日本の伝統文化も題に加えた。原田は写真撮影を趣味としており、記事には自身で撮影した的確な構図の美しい写真を添えている。これらが後の *Encyclopædia Britannica*（以下、『ブリタニカ』）14版記事の下地となる。1925年3月には第7回労働総会委員付でジュネーブに派遣され、続いて欧米の製鉄省調査をしている。帝博に入ってから1928年に第11回労働総会随員として派遣され⁶⁵⁾、海外任務は続いた。原田は日本政府の随員として黒子となりながら、美術の世界では記名記事を発信し、日本美術の受容を促し、文化交流を広げていった。

3. 日本美術英語解説執筆者としての業績

1926年末時点で *Studio* 誌に84本の記事を書いている原田は、すでに美術記事の執筆者として力量を世界に知られる存在になっていた。1927年に帝博の嘱託となると共に、本格的な執筆活動に入る。帝博と *Studio* 社を中心に著書が刊行され、ブリタニカ14版への寄稿は原田の執筆者としての地位を高め、国際文化振興会（以下、KBS）からの米国派遣では名誉文学博士号を贈呈されるまでに至る。

3-1. 東京帝室博物館での執筆活動（1927-1962）

『東京国立博物館百年史』に、関東大震災で本館を失った帝博では、大島

義脩総長が正倉院管理に熱心であったとある⁶⁶⁾。原田は大島から1925年と翌年に正倉院拝観期間中の通訳事務を嘱託され、48歳の1927年2月から帝博の英文列品目録及解説編集並通訳を嘱託される。17年間在野で美術記事を書いてきた原田はアカデミズムに入り、以降の肩書きは“Jiro Harada of the Imperial Household Museum, Tokyo”（帝博の原田）となり、病没する前年の1962年3月までの35年間⁶⁷⁾にわたり嘱託を続ける。

帝博の原田は、1928年10月刊行の『正倉院御物図録』第1輯（1955年配本の第18輯にて完結）で大島の解説への英語解説を、続いて『御物上代染織文』（1929）の井上清（1874-1939）の概説⁶⁸⁾に対する英語解説を書いた。両書共、原田の記名がなされ、日本文と対等な扱いがされている。この点が、現代の展覧会カタログなどの解説英訳が黒子的存在なのとは大きく異なる。原田は両書の英文巻頭言に、これらの英語解説には自由な裁量を与えられており、必要に応じて日本語原文の内容に説明を付け加え、完全に別の説明をした部分もあると書いている。帝博が原田の見識を信頼し、専門家として認識しているがこそその裁量付与と考えられる。欧米で評価されてきた原田の日本美術英語解説の力量と知名度が、日本のアカデミズムの頂点である帝博で認められた証しといえる。

帝博は原田の単著2冊⁶⁹⁾を出版している。*English Catalogue of Treasures in the Imperial Repository Shōsōin*（1932）は、正倉院及び各宝物の英語解説と図版80点に、和暦と西洋暦の対比付き簡易年表を付した専門書で、*Examples of Japanese Art in the Imperial Household Museum*（1934）は48点のコロタイプ図版に英語解説をした大型豪華本であった。原田は調査報告書などの英語解説の執筆や、賓客を含む英語話者の来館者案内なども担当していた。

3-2. Studio社での執筆活動（1910-1956）

1928年5月に原田初の単著である*The Gardens of Japan*がStudio社から出版された。日本庭園は欧米人に人気があり、原田が過去に携わった3つの博覧会はいずれも日本庭園が重要な展示で、当時の造園第一人者が作庭した。原田は博覧会の職務上の必要からも庭園を学び、後年には原田自身も自

邸の茶庭を作庭した⁷⁰⁾。同書は原田が撮影した庭園写真が豊富に使われている。それらは写真家の庭園写真と遜色がなく、片平(2007)が指摘するように構図に工夫があり⁷¹⁾、日本庭園写真に新たな視点を提示した。客観的で明確な歴史把握と説明に加え、描写意図が明瞭な写真を伴った同書は、片平やフィエヴェの記述のように欧米の日本庭園研究に貢献し続け、版元を変えて現在に至るまで覆刻されている。初版の扉には「帝博の原田」と記されている⁷²⁾。前掲の読売新聞に、「日本および日本人といふものを正確に外人に知らせたい⁷³⁾と語った原田の意図は現代でも生きていくといえる。

一方、*Studio* 誌への寄稿は帝博嘱託以降減り、1930年に2本、1931年はなし、1932年は1本、1933年1月478号を最後に22年間の長い休筆に入る。1955年に寄稿を再開したが翌年までの4本に留まり、760号「The Bonsai Exhibition in Tokyo」(東京盆栽展、1956)で全116本を終えた。

その他に同社からは浮世絵シリーズの *Hiroshige* (1929) (解説部分のみ)、笹内らが論じた *The Lesson of Japanese Architecture* (1936)、77歳での絶筆であり *The Gardens of Japan* の後継本となる *Japanese Gardens* (1956) を出版した。

3-3. ブリタニカ 14 版での執筆活動 (1929 年以降)

先行研究では言及されていないが、1929年9月に発売された『ブリタニカ』14版(英語版)に、原田は日本に関する13項目⁷⁴⁾を寄稿した。「創刊以来、各時代各分野の第一人者の寄稿を掲載するという方針⁷⁵⁾の百科事典である。14版は「国際的理解を深めること」を理想の1つに掲げ、「幅広く大衆向けに計画を練り、項目範囲を広げることに努め」、改訂を続けながら1973年まで販売された⁷⁶⁾。本田(2011)は、『ブリタニカ』は「明治以降の日本社会における学問の歩みに大きな影響を及ぼしてきた」とし⁷⁷⁾、南方熊楠(1897-1941)も14版を購入していたと記述している⁷⁸⁾。約3600名の寄稿者中に日本人が5名で、野口英世が「黄熱病」を寄稿している⁷⁹⁾。原田は「帝博の原田」、「元名高工・八高教授、パナマ博の日本政府官で *The Gardens of Japan* の著者」と紹介され、記事は10項目が原田提供の写真入りで、*Studio* 誌に掲載されたものが多く使われている。原田が長年続けた

Studio 誌の仕事が、世界的に認められる仕事に繋がった。

3-4. 国際文化振興会での執筆活動（1935年以降）

原田 56 歳の 1935 年に、国際文化振興会（以下、KBS）は原田をオレゴン州立大学交換教授として派遣した。芝崎（1999）によると、KBS は「日本の対外文化政策の中心となるべく」設立された⁸⁰⁾。藤田嗣治（1886-1968）や野口米次郎も KBS の文化事業を行った。原田は米国での知名度が高く対米方策の中心的存在として扱われていた⁸¹⁾。KBS 昭和 10 年度事業報告書は、原田の講演が「非常な好評を博し」、オレゴン大学教授会が「名誉文学博士の学位を授与した」と記載している⁸²⁾。原田は“Jiro Harada, Lit.D.”となった。帰国後にアメリカ各地での講演をまとめて *A Glimpse of Japanese Ideals* として 1937 年に KBS が出版し、好評を得て三版までに至った。同書をフィエヴェ（2011）は原田の「代表作」⁸³⁾ とし、日本文化研究者のブライス（Reginald H. Blyth, 1898-1964）は“conveying deep meanings by simplicity and directness”（深い意味を平易に率直に伝えている）（拙訳）と評価している⁸⁴⁾。

3-5. 日本美術理解への貢献と業績

日本文化中央聯盟⁸⁵⁾ から「恒久的」「広汎的」な日本文化伝播を目的に⁸⁶⁾、野間清六（1902-1966）らと共著の豪華本『日本美術聚英・絵画編』（1942）『建築庭園編』（1945）『彫刻工芸編』（1949）（いずれも英文書籍）が出版された。『文化日本』（1941）の野間と原田の記事からは実質 2 人が編纂したことがうかがわれる⁸⁷⁾。

戦後に原田は *The Shōsōin : An Eighth Century Repository*（1950）を単著で繭山龍泉堂から出した。同書は個人的出版の色合いが強く、序文に正倉院宝物が戦災から免れたことを世界に報告したかったと記述している。

原田の仲介役としての活動については、戦後の皇室から国立への移行交渉や⁸⁸⁾ 戦後初の海外美術展覧会としての講和記念サンフランシスコ日本古美術展覧会（1951）の実現に尽力したこと⁸⁹⁾ があげられる。同展はアメリカ巡回日本古美術展（1953）につながり、原田は米国各地で講演を行い好評

を得た。更に同展は文化庁主催の形で現代まで継続して世界各国で行われている。原田は国際会議などで培われた調整能力を70代の晩年に至っても発揮した。

4. おわりに

本稿では、先行研究を補いながら原田の経歴をたどり、業績を詳述した。原田の英語力は、少年期の渡米、米国生活をとおしての文化理解、大学で専攻した社会学と文学に裏付けされている。その基礎を以て博覧会や国際会議などで活躍し、日本美術に関する英語解説を執筆する機会を得て生涯の仕事とした。

原田の著作は原田自身の日本と欧米の文化への十分な理解に立脚しており、欧米文化圏の読者に日本をより良く理解させる説得力があった。原田の業績で卓越しているのは、一部の研究者や知識層しか読まない専門書だけではなく、一般の愛好家が読む美術雑誌や、あらゆる層が読む百科事典に第一人者として解説を残したことである。日本美術の受容に裨益し、現在もなお資料として用いられ、原田の貢献は続いている。

しかし原田の著作のほとんどは英語であり、国内では限られた図書館にしか所蔵がなく、出版当時から現代に至るまで日本で一般の目に触れることはほとんどない。海外では評価されてきた一方、国内では原田の業績への認識は現代でも低く、日本で正当な評価がされることが望まれる。今後は、原田の英語解説の方法や外国人を理解させた解説表現を研究し、欧米圏での日本美術の受容に対する原田の寄与を追究してゆく。

註

- 1) 英国出版の *The Studio* 誌 vol.50-152 (International 版は対象外)
- 2) 原田の翻訳とされる書籍は本論では含めない。
- 3) 工藤らは『日本デザイン学会研究発表大会概要集』(1999)でも原田に触れているが、原田を論点にしているのは工藤ら(2003)からとなる。

- 4) 片平 (2007) p.179
- 5) 同上, p.202
- 6) 同上, p.179
- 7) フィエヴェ (2011) p.73
- 8) 日付と役職名は履歴書から、博覧会関係は各報告書による。
- 9) Harada (1937) 著者紹介
- 10) 井關 (1987) p.173
- 11) 2020年9月聴取
- 12) 大島町誌編纂委員会編 (1959) 前掲, p.582
- 13) 同上, pp.672-673
- 14) 周防大島町ウェブサイト掲載「日本ハワイ移民資料館」
- 15) 石川 (1967) p.33
- 16) 大島町誌編纂委員会編 (1959) 前掲, p.838
- 17) 工藤・宮内 (2003) p.20
- 18) 井關 (1987) 前掲, p.173
- 19) 片山 (1901) p.10
- 20) M1410, roll 1, line number 9, record id 004893275_00116_8
- 21) 工藤・宮内 (2003) 前掲, p.20
- 22) LexisNexis (1901) p.2
- 23) 加藤 (1961) p.461
- 24) 同上, p.461
- 25) 片山 (1901) 前掲, pp.36-37
- 26) 松盛 (2016) p.65
- 27) 加藤 (1961) 前掲, p.461
- 28) LexisNexis (1901) 前掲, p.1
- 29) 井關 (1987) 前掲, p.173
- 30) 加藤 (1961) 前掲, p.114, 多くの移民は就業が目的で、米国の学校教育を受けず、英語や社会道徳・習慣などの大半は見覚え聞き覚えであったため米国で学業を修めた日本人先輩が私塾で教えていた。
- 31) 『麦嶺学窓』(1917) より特定

- 32) 帝国時事通信社編（1931） p.731
- 33) The University of California History digital archives
- 34) 同上
- 35) 同上
- 36) The University of California, Berkeley Art Museum and Pacific Film Archive
- 37) 読売新聞 1927年1月26日
- 38) 井關（1987）前掲， p.173
- 39) 楠元（2003） p.139
- 40) 加藤（2017） p.27
- 41) International Congress of Press、1904年5月16日-21日
- 42) 井關（1987）前掲， p.173
- 43) 同上， p.174， 非常事態を知らせる電信
- 44) 開校年は9月開講
- 45) 川澄（1978） p.38
- 46) 林（2015） p.13
- 47) 松村（2011） p.xxiv
- 48) Morrison（1911） p.viii
- 49) Schmalenbach（1935） p.53
- 50) ホーム（2011） p.18
- 51) 読売新聞（1927）前掲
- 52) The Japan Society サイト「1891年の設立より日英の相互理解に貢献」
- 53) ホーム（2011）前掲， p.18
- 54) オレゴン大ライブラリ検索、原田差出書翰 36通中6通、他親族宛私信
- 55) T715, roll 2850, 1920年10月2日サウザンプトン発ニューヨーク行乗船記録
- 56) 正倉院宝物は現在では国民の財産であるが、戦前は皇室所有であったため「御物」と呼称
- 57) 『正倉院御物拝観録』大正元年「正倉院拝観者御報告之件」
- 58) 加藤（2018） p.71

- 59) The Meriden Daily Journal, Fergus County Democrat, 1915 年 2 月 24 日
- 60) 沖田 (1982) p.44
- 61) 読売新聞 1916 年 3 月 15 日
- 62) 沖田 (1982) 前掲, p.44
- 63) 『麦嶺学窓』(1917) 前掲, pp.102-103
- 64) 鳥飼 (2013) pp.34-35
- 65) 受勲時履歴書に記載はないが、雑誌『風景』(1940)に「出た」と記述
- 66) 東京国立博物館編 (1973) p.433
- 67) 受勲時履歴書より算出
- 68) 第 1 輯から第 24 輯まで刊行し 1929 年に上下巻に総集刊行
- 69) 扉に“By Jiro Harada”
- 70) 原田『庭園』(1939) pp.304-311, (1940) pp.286-290
- 71) 片平 (2007) 前掲, pp.189-198
- 72) 覆刻版は肩書き不記載
- 73) 読売新聞 (1927) 前掲
- 74) 盆石、生け花、能、茶道、(以下日本に関する) 舞踊、建築、音楽、彫刻、木彫、象牙彫刻、博物館、美術界
- 75) 「The Prominent Contributors: ブリタニカの名だたる執筆陣」ブリタニカサイト
- 76) ギブニー (1995), pp.680-683
- 77) 本田 (2011) p.375
- 78) 同上, p.379
- 79) 原田以外の日本人は各 1 項目ずつ。東京都立中央図書館蔵 14 版 2020 年 11 月 4 日筆者計数
- 80) 芝崎 (1999) p.221
- 81) 国際文化 (1939) 口絵に原田の写真を大きく掲載
- 82) 国際文化振興会編 (1937) pp.55-56
- 83) フィエヴェ (2011) 前掲, p.73
- 84) ブライス『カルチュラル・イースト』pp.43-48

- 85) 東京文化財研究所 (1937) 記事番号 00260 「我が国文化の綜合進展と其の中外宣揚等を目的とする官民合同の中央的機関」として設立
- 86) 野間 (1941) p.63
- 87) 同上, p.67, 原田は「英文に翻訳したり、又所々勝手に綴つたりした」と記述。『建築庭園編』の扉に「By」の執筆者表記がないが、別の執筆者の記載もなく原田の英語解説と推定
- 88) 神辺 (2020)
- 89) 東京国立博物館編 (1973) 前掲, p.647, 作業をほぼ 1 ヶ月で完遂

参考文献

[日本語書籍]

- 井關九郎 (1987) 『近代防長人物誌・天』 マツノ書房 (『現代防長人物誌・天』改題復刻, 1917, 発展社)
- 大島町誌編纂委員会編 (1959) 『周防大島町誌』 山口県大島町役場
- 沖田武子 (1982) 『組香集・桂の雪』 沖田武子, 自費出版
- 片山潜 (1901) 『渡米案内・正編』 渡米協会
- 加藤新一 / 新日米新聞社編 (1961) 『米国日系人百年史：在米日系人發展人土録』 新日米新聞社
- 川澄哲夫 (1978) 『資料日本英学史 2』 大修館書店
- 國際文化振興会編 (1937) 『昭和十年度事業報告書』 國際文化振興会
- 芝崎厚士 (1999) 『近代日本と國際文化交流』 有信堂
- 人事興信所編 (1925) 『人事興信録第 7 版』 人事興信所
- 第八高等学校編 (1916) 『第八高等学校一覽第 10 年度』 第八高等学校
- 第八高等学校編 (1917) 『第八高等学校一覽第 11 年度』 第八高等学校
- 帝国時事通信社編 (1931) 『大東京構成の人及其事業：昭和七年度版』 帝国時事通信社
- 皇室博物館 (1928) 『正倉院御物図録』 第 1 輯, 皇室博物館
- 皇室博物館 (1929) 『御物上代染織文』 上・下, 皇室博物館
- 東京国立博物館編 (1973) 『東京国立博物館百年史』 東京国立博物館
- 鳥飼玖美子編著 (2013) 『よくわかる翻訳通訳学』 ミネルヴァ書房

名古屋高等工業学校編 (1916) 『名古屋高等工業学校一覽自大正6年至7年』
名古屋高等工業学校

名古屋高等工業学校編 (1917) 『名古屋高等工業学校一覽自大正7年至8年』
名古屋高等工業学校

ホーム、チャールズ他編, 菅靖子・門田園子訳 (2011) 『チャールズ・ホームの日本旅行記: 日本美術愛好家の見た明治』 彩流社

松村昌家 (2011) 『日英博覧会 (1910年) - 公式史料と関連文献集成』 ユーリカ・プレス

[外国語書籍]

Adachi, Y., Noma S., & Harada J. (Eds.) , (1942) . *Masterpieces of Japanese art* = 日本美術聚英 Vol.1. Tokyo: Nippon Bunka Chuo Renmei

Adachi, Y., Noma S., & Harada J. (Eds.) , (1944) . *Masterpieces of Japanese art* = 日本美術聚英 Vol.2. Tokyo: Nippon Bunka Chuo Renmei

Adachi, Y., Noma S., & Harada J. (Eds.) , (1949) . *Masterpieces of Japanese art* = 日本美術聚英 Vol.3. Tokyo: Nippon Bunka Chuo Renmei

Harada, J. (1928) . *The Gardens of Japan*. London: The Studio Ltd.

Harada, J. (1929) . *Hiroshige*. London: The Studio Ltd.

Harada, J. (1932) . *English Catalogue of Treasures in the Imperial Repository Shōsōin*. Tokyo: Imperial Household Museum of Tokyo

Harada, J. (1934) . *Examples of Japanese Art in the Imperial Household Museum*. Tokyo: Imperial Household Museum of Tokyo

Harada, J. (1936) . *The Lesson of Japanese Architecture*. London: The Studio Ltd.

Harada, J. (1937) . *A Glimpse of Japanese Ideals*. Tokyo: K.B.S. publications

Harada, J. (1950) . *The Shōsōin : An Eighth Century Repository*. Tokyo: Mayuyama & Co.

Harada, J. (1956) . *Japanese Gardens*. London: The Studio Ltd.

Morrison, A. (1911) *The painters of Japan*. London and Edinburgh: T.C. & E.C. Jack

Schmalenbach, F. (1935) . *Jugendstil : ein Beitrag zu Theorie und Geschichte*

〔論文〕

- 石川友紀 (1967) 「山口県大島郡久賀村初期ハワイ契約移民の社会地理学的考察」『地理科学』7, pp.25-37
- 江本弘 (2020) 「建築語彙のなかの『シブイ』とその国際化過程」『日本建築学会計画系論文集』85 (769), pp.753-759
- 片平幸 (2007) 「欧米における日本庭園像の形成と原田次郎の The Gardens of Japan」『日本研究』34, pp.179-208
- 加藤絵里子 (2017) 「セントルイス万国博覧会における日米関係：世紀転換期の日米の外交的意図に着目して」『お茶の水史学』61, pp.1-38
- 加藤絵里子 (2018) 「パナマ太平洋万国博覧会への日本の参加経緯について：日米間の現地民間ネットワークに注目して」『日本史攷究』42, pp.70-99
- 神辺知加 (2020) 「帝室博物館の国立移管および国立博物館設立について：GHQ資料に基づいた一考察」『東京国立博物館紀要』55, pp.9-50
- 楠元町子 (2003) 「セントルイス万国博覧会と日露戦争：異文化交流の視点から」『異文化コミュニケーション研究』6, pp.135-150
- 工藤芳彰・宮内哲 (1999) 「日英博覧会出品の日本美術・工芸品に対する『ステューディオ』誌の視点」『日本デザイン学会研究発表大会概要集』, pp.198-199
- 工藤芳彰・宮内哲 (2003) 「『ステューディオ』誌の日本に関する記事 (1902-1915) の掲載意図」『デザイン学研究』50 (4), pp.11-20
- 笹内宏紗・渡邊研司 (2018) 「原田治郎による "The Lesson of Japanese Architecture" (1936) の出版と社会背景」『2017年度日本建築学会関東支部研究報告書集Ⅱ』88, pp.667-670
- 志邨匠子 (2012) 「サンフランシスコ日本古美術展覧会 (1951年) と冷戦下の日米文化外交」『多摩美術大学紀要』27, pp.87-102
- 管靖子 (2010) 「両大戦間期イギリスの空間のジャポニスムにみる生け花・盆栽の影響」『デザイン学研究』57 (4), pp.1-10
- 林みちこ (2015) 「1910年日英博覧会の両義性：「官製日本美術史」と「見

- 世物興業」のあいだで』『藝叢：筑波大学芸術学研究誌』30, pp.13-22
 フィエヴェ、ニコラ (2011) 「日本庭園について英・仏語で出版された三冊
 の主要な書物」『比較日本学教育研究センター研究年報』7, pp.65-78
 本田毅彦 (2011) 「日本社会と『ブリタニカ百科事典』『オックスフォード
 英語辞典』『イギリス国民伝記事典』の接触」『帝京史学』26, pp.375-
 396
 松盛美紀子 (2016) 「第三章『麦嶺学窓』と『南加学窓』からみる戦前期の
 在米日本人留学生像」河原典史・日比嘉高編『メディア—移民をつなぐ、
 移民がつなぐ』クロスカルチャー出版, pp.65-96

[公文書]

- 宮内庁 (1890-1921) 『正倉院御物拝観録』「大正元年」
 国立公文書館 (1963) 「元文部事務官原田治郎外二十六名叙勲、木杯下賜、
 勲章加授及び勲章贈与について」『昭和三十八年内閣人事公文叙勲内国
 人二七八月三第二七巻』
 商工省商務局博覧会監理課 (1937) 『重要万国博覧会概要』
 東京国立博物館 (1927) 「囑託採用二付伺」『MF2092』
 農商務省 (1912) 『日英博覧会事務局事務報告』
 農商務省 (1917) 『巴奈馬太平洋万国博覧会参同事務報告』
 LexisNexis. (1901) . Southern P. Co. v. Harada, 109 F. 379. Circuit Court of
 Appeals, Ninth Circuit. May 31, 1901.
 National Archives Microfilm Publication. (1893-1953) . Passenger Lists
 of Vessels Arriving at San Francisco, CA. M1410, roll 1, line number 9,
 record id 004893275_00116_8
 National Archives Microfilm Publication. (1897-1957) . Passenger and
 Crew Lists of Vessels Arriving at New York, New York, T715, roll 2850

[新聞]

- The Meriden Daily Journal* (1915 February 24) . Dynamite Placed in
 Japanese Exhibit. *The Meriden Daily Journal*
Fergus County Democrat (1915 February 24) . Stick of Dynamite Placed
 under Showcase in the Japanese Exhibit at FRISCO Fair. *Fergus County*

Democrat. p.8

「原田教授の新婚:よみうり婦人附録」『読売新聞』朝刊(1916年3月15日)

東京:読売新聞社

「読書界出版界:雑誌『スタジオ』の日本庭園号が本年倫敦から」『読売新聞』

朝刊(1927年1月26日)東京:読売新聞社

【雑誌】

晩村子(1917)「同窓生之消息」『麦嶺学窓』8, 加州大学日本人学生倶楽部

pp.102-103

国際文化振興会(1939)「講師及調査連絡員の派遣」『国際文化』(4)

原田治郎(1939)「我が庭の石」『庭園』21(9), 日本庭園協会 pp. 304-

311

原田治郎(1940)「熱川の一週間」『風景= The landscape』7(5), 日本風

景協会 pp.27-30

原田治郎(1940)「我家の庭」『庭園』22(9), 日本庭園協会 pp. 286-291

野間清六、原田治郎(1941)「日本美術聚英の編纂に就て」『文化日本』5(7),

日本文化中央聯盟 pp.62-68

Blyth, R.H. (1946). A Glimpse of Japanese Ideals. *The Cultural East*, 1

(1), Kanagawa: Matsugaoka Library, pp.43-48

Harada, J., *The Studio: An Illustrated Magazine of Fine and Applied Art*,

London: The Studio Ltd. No. 208, 212, 214, 216, 218, 222, 224, 232,

234, 237, 238, 239, 240, 242, 243, 245, 246, 247, 249, 251, 252,

253, 254, 255, 258, 259, 261, 263, 264, 266, 269, 273, 282, 283,

284, 286, 287, 290, 292, 293, 294, 295, 296, 298, 299, 303, 304,

305, 309, 316, 322, 399, 356, 366, 367, 368, 369, 370, 371, 373,

374, 375, 376, 377, 378, 379, 380, 381, 384, 385, 386, 387, 388,

390, 391, 392, 396, 397, 398, 399, 401, 402, 403, 405, 406, 408,

409, 410, 411, 412, 413, 414, 416, 417, 418, 419, 420, 421, 422,

425, 426, 427, 431, 432, 439, 440, 441, 442, 443, 468, 478, 748,

749, 759, 760

[事典]

ギブニー、フランク・B. 編 (1975、1995) 『ブリタニカ国際大百科事典』 テイビーエス・ブリタニカ, 初版 (1975) 総索引、第3版 (1995) 15巻
Encyclopædia Britannica. (1929) . *The Encyclopædia Britannica : a new survey of universal knowledge*. 14th ed. London, New York: Encyclopædia Britannica. (原田の寄稿記事が掲載されている vol.3, 7, 9, 12, 15, 16, 20, 21, 23, 24 を参照)

[インターネット資料]

周防大島町 (2019) 「人口・面積 (平成 31 年 4 月 1 日現在)」 「日本ハワイ移民資料館」, 周防大島町ウェブサイト (<https://www.town.suo-oshima.lg.jp>) (2021 年 5 月 6 日閲覧)

ブリタニカの歴史「The Prominent Contributors : ブリタニカの名だたる執筆陣」, ブリタニカジャパンウェブサイト (<https://www.britannica.co.jp/>) (2021 年 6 月 1 日閲覧)

Oregon Digital, 「Jiro Harada 検 索 」 Oregon State University Libraries website (<https://oregondigital.org>) (2021 年 5 月 10 日閲覧)

The University at the Turn of the Century: 1899-1900 (2006) The University of California History digital archives website (<https://www.lib.berkeley.edu/uchistory/>) (2021 年 7 月 2 日閲覧)

BAMPFA Mission and History, University of California, Berkeley Art Museum & Pacific Film Archive website (<https://bampfa.org/>) (2021 年 7 月 2 日閲覧)

THE JAPAN SOCIETY website (<https://www.japansociety.org.uk>) (2021 年 7 月 5 日閲覧)

日本文化中央連盟結成 (2014) 「日本文化中央連盟結成」 2014 年 04 月 11 日登録, 東京文化財研究所ウェブサイト (<https://www.tobunken.go.jp/>) (2021 年 7 月 5 日閲覧)

[その他]

聴き取り調査スクリプト (2020), 2020 年 9 月 28 日に河野出奈に電話による聞き取りを行い、文字に起こし、同年 10 月 7 日文書にて確認済